

# 無人島キャンプ体験による 自尊感情と自意識の変容に関する研究

——私立中学校の生徒を対象とした調査結果をもとに——

小谷 正登・瀧 和恵

## 問 題 と 目 的

文部科学省の2011年度問題行動調査の結果によると、いじめの認知件数は約7万件となり全校種で減少した。そして、暴力行為の発生件数も2年連続で減少している。一方、小中高校の不登校の児童生徒数は173,750人となり2年ぶりに減少しているものの小学校のみでは増加しており、低年齢化が進んでいる。不登校になったきっかけと考えられる状況については、小中学校の場合、「不安など情緒の混乱」が全体の26.5%、「無気力」が24.4%と本人に関する問題が続いている<sup>(1)</sup>。渡辺ら(2001)は、自尊感情と達成動機に注目して、以上の不登校児童生徒に対する支援の一環としてのキャンプ体験の有効性について述べている。次に、減少はしているものの小・中学生、高校生の暴力行為の発生件数は5万5000件を超えている<sup>(1)</sup>。このような状況の要因として以前から、児童・生徒が自分の感情をコントロールできない状況、対人関係能力の不足、生活時間の乱れなどがあげられている。青木・永吉(2003)は、以上の状況の一要因として児童・生徒の社会的スキルの低下をあげ、キャンプ参加者の特性が大きく関係しているものの、キャンプ体験によって参加者の社会的スキルが向上することを明らかにしている。関根・飯田(1999)は、小学生を対象とした調査結果からキャンプ体験による自己概念、特に達成動機と努力主義の向上を述べている。また蓑内(2008)は、組織的なキャンプ活動

の教育的側面の1つとして、自尊感情や身体的自己概念の成長をあげている。

その高さが精神的な安定性や前向きな行動につながるといわれる自尊感情を、Rosenberg (1965) は、「ひとつの特殊な対象すなわち自己 (self) に対する肯定的または否定的な態度」としてとらえている。これを受け桜井 (2000) は、このような自尊感情には大きく異なった二つの側面、つまり個人が自分は「とてもよい (very good)」と感じる側面と、もうひとつとして「これでよい (good enough)」と感じる側面があるとしている。さらに、前者は他者に対する「自信」や「優越感」、後者は前者とは異なり「自己受容」を意味する自尊感情と考えることができるとしている。また、藤瀬・古川 (2005) は、自尊感情の高さと自己意識の一側面である私的自己意識の高さの間に関連があるとしている。

自分自身を意識することである自己意識は、私的自己意識と公的自己意識の2側面から構成される。私的自己意識は、自分の内面や気分など、他者からは直接観察することができない自己の側面に注意を向けることであり、公的自己意識は、自分の服装や髪形、言動などの他者が観察できる自己の側面に注意を向けることとされる (菅原, 1984)。また、私的自己意識が高い者はその時々で自分の意見、態度を自覚しているため、態度と行動との一貫性が高いとされ (Scheier, 1980)、公的自己意識の高い者は他者の目を意識して自己表出の方法を制御する傾向が強く (Scheier, 1980)、他者からの評価的態度に敏感であるとされる (Fenigstein, 1979)。

以上のような先行研究の知見を受け、本論文では、自己概念を「個人が自分の身体、性格、社会的役割などの諸属性について持っているイメージ」という一般的意味としてとらえ、思春期にあつて自己概念が大きく変容する中学生が参加する無人島におけるキャンプ活動での体験と以上の自尊感情と自己意識との関連性を分析・考察することによって、キャンプ体験の教育的意義を検討することを目的とする。

## 方 法

### 1 本研究の研究モデル

本研究では、キャンプ体験以前における日常生活場面を測定基準（Pre）とし、時系列的にその後のキャンプ体験を経たキャンプ終了1ヵ月後の日常生活場面（Post）において事後調査を実施した。そして、キャンプ体験前後の学校生活場面および日常生活場面で測定した自尊感情と自意識を比較することによって、キャンプ体験による自尊感情と自意識の変容過程を明らかにする研究モデル（Pre-Post モデル）として研究を行った。

### 2 調査対象・時期

A 市に位置する私立のキリスト教主義中学校（男子校）である B 中学校に在籍する中学校2年生181名の中で、5泊6日の日程（A・B 班の2班編成、A 班：2012年8月1日～6日・B 班：8月7日～12日）の夏期キャンプに参加した179名を調査および分析対象とした。第1回調査（Pre 調査）は、キャンプ参加前の2012年7月18日に、第2回調査（Post 調査）は、キャンプ終了1ヵ月後の9月13日に実施した。

### 3 キャンプの概要

調査対象校の B 中学校は約90年前から、キャンプ活動をその学校教育の中心に取り入れてきた。その趣旨は、キリスト教主義学校としての建学の精神に基づく社会的意義や精神的内容を理解させることである。学校内の授業やホームルームだけではなく、自然の広がりをもった野外という非日常性の中で仲間や先輩リーダーたちとの共同生活を行うことにより、その意義や内容を理解させ、それに伴う生徒たちの生活姿勢の方向付けを行うとともに、そのために必要な基本的訓練の場を提供することであることとされる。そして、同キャンプではあえて不便さを重要視しており、自然や仲間との共同生活から、様々な実体

験を通して知識を得て、強靱な体力と精神力を培い、それによって築きあげられる人間形成を目的とした教育活動が行われている。

また、学校教育におけるキャンプ活動は、教育課程の一領域である特別活動の中の学校行事に該当する。そして、旅行・集団宿泊的行事として、学習指導要領に示されている「学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。」という目標を達成することが求められている<sup>(2)</sup>。そこで、「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」を内容とする旅行・集団宿泊的行事<sup>(2)</sup>の一つとして、現在、B 中学校では新入生を対象に、4 月に行われるオリエンテーションキャンプ、2 年生を対象にした同夏期キャンプなどが学校行事の中に位置づけられている。

なおこの夏期キャンプは、C 県に位置し、約 50 年前に B 中学校が購入した約 3 万坪の無人島で、夏休み中の 8 月に行われている。班編成については、2 年生約 180 名を約 90 名ずつの A 班・B 班の 2 班に分けて、それぞれ 5 泊 6 日の別日程でキャンプを行う。どちらの班に参加するかは生徒が所属する各部活動の日程によって左右されることが多いが、原則的には生徒たちの自由選択である。さらに、生徒たちがキャンプ中、寝食など全てを共にする活動班として約 5 人 1 組の班を生徒たちは、自らメンバーを決定し、班長と副班長などの役割を決めて形成する。この班を小班という。A・B 班で、この小班はそれぞれ 18 班程度形成される。また、1 班と 2 班、3 班と 4 班など奇数班と偶数班を合わせて大班という班も形成され、キャンプ中のテントでの就寝時以外のほとんどのプログラムをこの大班で行うことになる。大班のメンバーも生徒たちが事前に生徒自らが形成したグループである。また、各小班に 1 名の大学生リーダーが加わり、寝食をはじめ生徒たちとはほぼ同様のプログラムを過ごす。このように小班につく大学生リーダーを班付きリーダーという。この他、チーフリーダーを中心に本部リーダーとしての大学生リーダーがおり、教員と

表 1 タイムテーブル (5泊6日)

時間	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目	第6日目
6:00		20 起床、洗面	20 起床、洗面	20 起床、洗面	20 起床、洗面	20 起床、洗面
7:00		朝拝、旗上げ、朝食	朝拝、旗上げ、朝食	朝拝、旗揚げ、朝食	朝拝、旗上げ、朝食	朝拝、旗上げ、朝食
8:00	20 集合・バス乗車	(パンなどの配給)	(パンなどの配給)	(パンなどの配給)	(パンなどの配給)	(パンなどの配給)
9:00		班別生活ワーク	全員ワーク	班活動	班活動	キャンプデ्यूティ 一、食器返却②
10:00						
11:00	バス到着 (〇〇港)					
11:30	30 乗船					30 閉会礼拝
12:00	船到着 (△島)、旗上げ、昼食 (特参弁当)	昼食 (弁当配給)	昼食 (弁当配給)	昼食 (弁当配給)	昼食 (弁当配給)	昼食 (弁当配給)、食器返却③、45 旗下げ、乗船
13:00	開会礼拝					30 船到着 (〇〇港)、バス乗車
14:00	オリエンテーション					
15:00	テントサイトづくり、テント設営、夕食づくり、夕食	班活動	班活動	遠泳 (潮の都合で時間が前後する場合あり)	班活動	
16:00		夕食づくり、夕食	夕食づくり、夕食	夕食づくり、夕食	夕食づくり、夕食、食器の返却①	
17:00						
18:00						
19:00	旗下げ、班別ミーティング	旗下げ、夜の班活動	旗下げ、夜の班活動	旗下げ、夜の班活動	旗下げ、班長ミーティング、班別ミーティング	バス到着、解散
20:00						
21:00	班長ミーティング	班長ミーティング	班長ミーティング	班長ミーティング	30 メディテーション カウンシルファイヤー	
22:00	班別ミーティング、晩祷、生徒就寝、リーダーズミーティング	班別ミーティング、晩祷、生徒就寝、リーダーズミーティング、リーダー・教員就寝	班別ミーティング、晩祷、生徒就寝、リーダーズミーティング、リーダー・教員就寝	班別ミーティング、晩祷、生徒就寝、リーダーズミーティング、リーダー・教員就寝	生徒就寝、リーダーズミーティング、リーダー・教員就寝	
23:00	リーダー・教員就寝					

共にキャンプの運営を行っている。

同キャンプのタイムテーブルおよびプログラムの詳細は、表 1 の通りであり、特別に自尊感情や自意識の育成を目的としたプログラムは取り入れられていない。

#### 4 調査内容

キャンプ体験前後の自己概念の変容過程を検討するため、質問紙を用いて Pre-Post モデルの調査を行った。本調査に用いた質問紙項目の内容は、以下の通りである。

##### 第 1 回調査（以降、「プレ調査」と表記）

- (1) フェイスシート：組・番号の 2 項目
- (2) キャンプへの期待度，現在の学校生活の充実度の 2 項目  
(多肢選択式)
- (3) キャンプ体験前の自尊感情・自意識
  - ・自尊感情（10 項目）
  - ・自意識（21 項目） 私的自意識（10 項目）  
公的自意識（11 項目）

##### 第 2 回調査（以降、「ポスト調査」と表記）

- (1) フェイスシート：組・番号の 2 項目
- (2) キャンプの満足度，現在の学校生活の充実度の 2 項目  
(多肢選択式)
- (3) キャンプ体験後の自尊感情・自意識
  - ・自尊感情（10 項目）
  - ・自意識（21 項目） 私的自意識（10 項目）  
公的自意識（11 項目）
- (4) キャンプ体験後の様々な変化について
  - ・キャンプ前後の心的状態の変化（自由記述式）
  - ・班付きリーダー（大学生）への感想（自由記述式）

- ・友人関係の変化（多肢選択式）
- ・キャンプ体験後の自分自身への気づきの度合い（多肢選択式）
- ・キャンプ体験後の友人への気づきの度合い（多肢選択式）
- ・キャンプ体験中に最も印象深かったプログラム（多肢選択式）

なお本論文では、自由記述において得たデータについては分析対象外とした。

### 自尊感情と自意識の測定（第1回・第2回調査）

自尊感情の測定にあたっては、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版尺度（山本・松井・山成，1982）を使用した。質問項目は10項目で構成されており、逆転項目が5項目含まれている。評定は5段階評定を用い、「あてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「ややあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点（逆転項目ではこの反対）とした。10項目による尺度得点の理論的範囲は、10～50点となる。

自意識の測定については、菅原（1984）が作成・編集した自意識尺度を使用した。質問項目は21項目で構成されており、逆転項目が2項目含まれている。評定は7段階評定を用い、「全くあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「ややあてはまらない」を3点、「どちらともいえない」を4点、「ややあてはまる」を5点、「あてはまる」を6点、「非常にあてはまる」を7点（逆転項目ではこの反対）とした。11項目による尺度得点の理論的範囲は、11～77点となる。

## 5 手続き

調査協力について書面でB中学校の校長に依頼し、承諾を得た後、同校の生徒対象に質問紙調査（無記名・自記式）を行った。質問紙は担任教員を通じて配布し、回答が強制的にならないように留意し回答を得た。各質問紙に対する回答の所要時間は、約10分間であった。なお調査にあたっては、人権保護および個人情報保護に配慮するため、実施前に関西学院大学「人を対象とした

臨床・調査・実験研究倫理委員会」へ研究を申請し、その承認を得た（受付番号 2012-12）。

結 果 と 考 察

1 自尊感情・自意識の変化

キャンプ参加前後の自尊感情及び自意識の変化を検討するため、プレ調査の各平均得点と、ポスト調査の各平均得点を T 検定（対応あり）によって比較した。その結果、自尊感情（ $t(163) = -0.57, n.s.$ ）で有意差は認められなかったが、自意識では有意差があり（ $t(160) = -2.07, p < .05$ ）、自意識の得点の向上が認められた。次に、自意識の下位カテゴリーである私的自意識と、公的自意識の平均得点を比較したところ、公的自意識（ $t(160) = -1.15, n.s.$ ）で有意差は認められなかったが、私的自意識（ $t(160) = -2.25, p < .05$ ）では有意差があり、私的自意識の得点の向上が認められた（表 2）。以上から、キャンプの前後において、自尊感情および公的自意識の得点の向上を見ることはできなかったが、自分の内面や気分など、他者からは直接観察することができない自己の側面に注意を向けることである私的自意識の得点の向上を見ることはでき、自己概念が大きく変容する中学生の内省面の変化を窺うことができた。

表 2 キャンプ参加前後の「自尊感情」および「自意識」得点の変化

	参加前	参加後	t 値
自尊感情得点の平均値	31.91 (6.51)	31.94 (7.15)	-0.57 n.s.
自意識得点の平均値	89.28 (18.47)	91.55 (18.22)	-2.07*
公的自意識の平均値	48.87 (12.10)	49.65 (11.68)	-1.15 n.s.
私的自意識の平均値	40.41 (10.01)	41.89 (10.09)	-2.25*

\* $p < .05$  † $p < .10$ , ( ) は SD



## 2 参加生徒の特性による自尊感情・自意識の変化

「キャンプ期待度」と「自尊感情」および「自意識」（プレ調査）の関係

青木・永吉（2003）は、キャンプ参加者の特性の一つとしてキャンプ体験の有無を取り上げ、キャンプ体験者の方が長期キャンプ体験によって社会的スキルが向上したと述べている。一方、本論文での調査対象者全てが入学直後にキャンプを体験しているため、他の特性として、これまでのキャンプ体験を踏まえた夏期キャンプ前の「期待度」の高さを取り上げ、キャンプ前の「期待度」の高さと自尊感情及び自意識の関係について検討を行った。プレ調査における「期待度」を示すと考えられる「あなたは青島キャンプが楽しみですか」という問いに対して、「とても楽しみ」、もしくは「少し楽しみ」と答えた生徒を「期待度高群」（ $n=129$ ）、「あまり楽しみではない」、もしくは「全く楽しみでない」と答えた生徒を「期待度低群」（ $n=45$ ）とし2群に群分けを行った。各群のプレ調査における自尊感情平均得点を T 検定（対応なし）によって比較したところ、自尊感情（ $t(167) = -0.64, n.s.$ ）および公的自意識（ $t(168) = 1.10, n.s.$ ）で有意差は認められなかったが、自意識で有意な傾向が見られ（ $t(168) = 1.81, p < .10$ ）、私的自意識では期待度低群より期待度高群の平均得点が有意に高く（ $t(168) = 2.11, p < .05$ ）、期待度の高さと私的自意識の高さの関連が認められた（表 3）。以上から、キャンプに対する期待度が低い者は、期待度が高い者と比較すると自尊感情、自意識および公的自意識でそれぞれの高さに差はなかったが、期待度の高い者の方が低い者より私的自意識が高いことが示された。夏期キャンプに参加するまでのキャンプ体験などの影響を受けて形成されている期待度が低い状態は、キャンプ体験に対する否定的なイメージを表していると考えられる。そして、この否定的なイメージと私的自意識の低さ、つまり内省面の低さが互いに関連し双方向的な関係を形成していると推測できる。

次に、期待度と自尊感情および自意識との関係をさらに検討するため、自尊感情、自意識（私的・公的自意識）のそれぞれについて、2（期待度高群・低群） $\times$ 2（プレ調査・ポスト調査）の分散分析を行った。期待度要因は被験者

表 3 期待度別のキャンプ参加前の「自尊感情」および「自意識」得点の変化

	期待度高群	期待度低群	t 値
自尊感情得点の平均値	31.55 (6.15)	32.27 (7.31)	-0.64 n.s.
自意識得点の平均値	91.37 (16.63)	84.31 (23.23)	1.82†
公的自意識の平均値	49.80 (11.23)	47.12 (14.35)	1.10 n.s.
私的自意識の平均値	41.57 (8.93)	37.19 (12.44)	2.11*

\* $p < .05$  † $p < .10$ , ( ) は SD

間要因であり、調査要因は被験者内要因であった。

自尊感情において、期待度要因 ( $F(1,162) = 0.001$ , n.s.), 調査要因 ( $F(1,162) = 0.48$ , n.s.) とともにその主効果は有意ではなく、交互作用も有意ではなかった ( $F(1,162) = 2.60$ , n.s.)。自意識においては、期待度要因 ( $F(1,159) = 5.21$ ,  $p < .05$ ) および調査要因 ( $F(1,159) = 3.95$ ,  $p < .05$ ) とともにその主効果は有意であったが、交互作用は有意ではなかった ( $F(1,159) = 0.19$ , n.s.) (図 1)。

次に、公的自意識においては、期待度要因 ( $F(1,159) = 1.99$ , n.s.), 調査要因 ( $F(1,159) = 0.91$ , n.s.) とともにその主効果は有意ではなく、交互作用も有意ではなかった ( $F(1,159) = 0.001$ , n.s.)。一方、私的自意識においては、期待度要因 ( $F(1,159) = 6.38$ ,  $p < .05$ ) および調査要因 ( $F(1,159) = 5.37$ ,  $p < .05$ ) とともにその主効果は有意であったが、交互作用は有意ではなかった ( $F(1,159) = 0.59$ , n.s.) (図 2)。

以上から、夏期キャンプへの期待度が低い者は、自意識、とくに私的自意識においてキャンプ体験前後で変容する程度が大きいことが示唆された。期待度の低い者は、キャンプに対する否定的なイメージが強いと考えられる。その状態で様々なプログラムに参加し、対人関係面の経験を積むことなどによって自分の内面や気分などの自己の側面に注意を向ける機会につながり、自分自身への意識である自意識、特に私的自意識が変容したと推測できる。

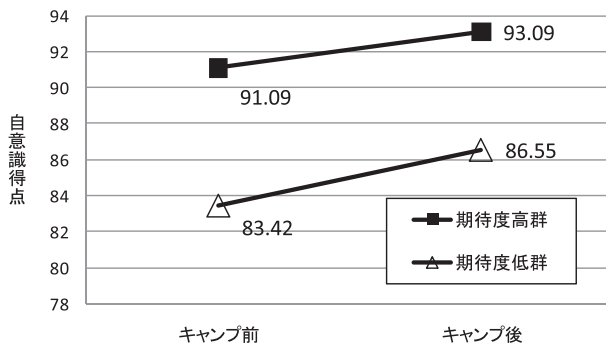


図 1 期待度高群・低群における自意識の変化

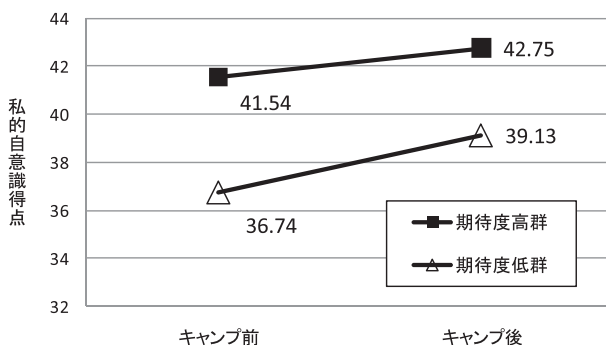


図 2 期待度高群・低群における私的自意識の変化

### 3 ポスト調査によるキャンプ満足度と学校生活の諸側面の関係

キャンプ体験の教育的意義をさらに検討するため、ポスト調査におけるキャンプ体験についての満足度とキャンプ後の学校生活の諸側面の関連を分析した。キャンプ参加後の「満足度」を示すと考えられる「あなたは青島キャンプが楽しかったですか」という問いに対して「とても楽しかった」、もしくは「少し楽しかった」と答えた生徒を「満足度高群」(n=143)、「あまり楽しくなかった」、もしくは「全く楽しくなかった」と答えた生徒を「満足度低群」(n=26)とし2群に群分けを行った。

この満足度（高群・低群）とキャンプ体験後の学校生活の諸側面に関する項

目の間でクロス集計を行い、 $\chi^2$  検定を実施した。なお  $\chi^2$  検定を実施するにあたり、学校生活の諸側面の項目に関して、キャンプ体験後の学校生活の充実度（以降、「充実度」と表記）を示すと考えられる「あなたはキャンプを終えて、今の学校生活はより充実していると思いますか」という問いに対する回答の中で、「とても充実している」、もしくは「充実している」と答えた生徒を「充実度高群」（ $n=155$ ）、「あまり充実していない」、もしくは「全く充実していない」と答えた生徒を「充実度低群」（ $n=19$ ）とし 2 群に群分けを行った。

次に、キャンプ参加後の友人関係の深化度（以降、「深化度」と表記）を示すと考えられる「あなたは、キャンプを終えて友人関係は深まったと思いますか」という問いに対する回答の中で、「とても深まった」、もしくは「深まった」と答えた生徒を「深化度高群」（ $n=146$ ）、「あまり深まらなかった」、もしくは「全く深まらなかった」と答えた生徒を「深化度低群」（ $n=27$ ）とし 2 群に群分けを行った。そして、キャンプ参加後の自分への新たな気づき度を示す「キャンプを終えて、自分自身について新たに何か気づいたことはありますか」という問い、および、キャンプ参加後の友人への新たな気づき度を示す「キャンプを終えて友達について新たに何か気づいたことはありますか」という問いに対する回答の中で、「たくさん気づいた」、「気づいた」と答えた生徒を「気づき度高群」（ $n=$ 自分：87, 友人：91）、「あまり気づかなかった」、「全く気づかなかった」と答えた生徒を「気づき度低群」（ $n=$ 自分：87, 友人：83）とし 2 群に群分けを行った。 $\chi^2$  検定の結果、「満足度」と「充実度」および「深化度」の間に有意差があり、関連が認められた。一方、「満足度」と「自分への気づき度」の間では有意差が認められず、「友人への気づき度」との関係では有意な傾向のみが示された（表 4）。なお、満足度各群（高群・低群）のポスト調査における平均得点を T 検定（対応なし）によって比較したところ、自尊感情（ $t(167)=1.24$ , n.s.）、自意識（ $t(165)=0.27$ , n.s.）、私的自意識（ $t(165)=0.00$ , n.s.）、公的自意識（ $t(165)=0.32$ , n.s.）の全てにおいて有意な差が認められなかった。「自分への気づき度」、「友人への気づき度」は自意識に関連するものと考えられ、「満足度」と「自分への気づき度」およ

表4 満足度（高群・低群）とキャンプ後の学校生活の諸側面

	満足度高群 (147 名)	満足度低群 (27 名)	全体 (174 = n)
学校生活の充実度（とても・充実している／あまり・充実していない）			$\chi^2(1) = 7.40^*$
キャンプ後の友人関係の深化度 （とても・深まった／あまり・全く深まらなかった）			$\chi^2(1) = 7.63^*$
自分への新たな気づき度 （たくさん・気づいた／あまり・全く気づかなかった）			$\chi^2(1) = 1.10$ n.s.
友人への新たな気づき度 （たくさん・気づいた／あまり・全く気づかなかった）			$\chi^2(1) = 2.98^\dagger$

\* $p < .05$      $^\dagger p < .10$ 

び「友人への気づき度」との間で有意な関連を見ることができなかった  $\chi^2$  検定の結果と同様となった。

さらに  $\chi^2$  検定後、その結果の分布の偏りにおいて有意差が確認された「学校生活充実度」及び「友人関係深化度」について、「満足度」とキャンプ後の学校生活の諸側面の関連をより明確にするため、5% の標準正規偏差値 1.96 を基準にして、調整された残差の値（表中の太字）を比較する Haberman 法による残差分析を行った。なお、この分析の結果から、分析表の中に示された調整済残差の値（太字の値）が「+1.96」を超えていればその割合が5% 水準で有意に高く、「-1.96」を下回っていればその割合が5% 水準で有意に低いとすることができる（竹原, 2007）。

ポスト調査におけるキャンプ「満足度」（高群・低群）と「学校生活充実度」（高群・低群）との関係において、キャンプ満足度高群の割合は学校生活充実度高群で有意に高く、学校生活充実度低群で有意に低かった。反対にキャンプ満足度低群の割合は、学校生活充実度高群で有意に低く、学校生活充実度低群で有意に高かった（表5）。以上から、キャンプでの良い体験がその後の学校生活の充実度に影響を与えていることが示唆された。

次に、「友人関係深化度」（高群・低群）との関係では、満足度高群の割合は深化度高群で有意に高く、深化度低群で有意に低かった。反対に満足度低群の割合は、深化度高群で有意に低く、深化度低群で有意に高かった（表6）。

表5 キャンプ満足度（高群・低群）×学校生活充実度（高群・低群）

	学校生活充実度高群	学校生活充実度低群	合計	$\chi^2(df=1)$
キャンプ満足度高群	135(77.6%)	12(6.9%)	147(84.5%)	7.399*
調整済み残差	2.7	-2.7		
キャンプ満足度低群	20(11.5%)	7(4.0%)	27(15.5%)	
調整済み残差	-2.7	2.7		
合計	155(89.1%)	19(10.9%)	174(100.0%)	

\* $p < .05$ 

表6 キャンプ満足度（高群・低群）×友人関係深化度（高群・低群）

	友人関係深化度高群	友人関係深化度低群	合計	$\chi^2(df=1)$
キャンプ満足度高群	128(74.0%)	18(10.4%)	146(84.4%)	7.633*
調整済み残差	2.8	-2.8		
キャンプ満足度低群	18(10.4%)	9(5.2%)	27(15.6%)	
調整済み残差	-2.8	2.8		
合計	146(84.4%)	27(15.6%)	173(100.0%)	

\* $p < .05$ 

以上から、キャンプでの良い体験による満足感は、自分および友人への気づきとは直接的な関連はなかったが、その後の学校生活の充実や友人関係の深化には関連していることが示唆された。なおこの結果は、内省的な内容ではなく、表面的な満足度を問う設問内容（「あなたは青島キャンプが楽しかったですか」）に関係していると考えられる。

### まとめと今後の課題

本論文では、キャンプ体験の教育的意義を検討するため、私立中学校の学校行事の一つである無人島でのキャンプ活動の体験と自尊感情と自意識との関連性を分析・考察した。

まず、キャンプ参加前後の自尊感情および自意識の変化を検討するため、キ

キャンプ体験前の各平均得点と体験後の各平均得点を比較したところ、自尊感情で有意差は認められなかったが、自意識では有意差があり、自意識の得点の向上が認められた。そして、自意識の下位カテゴリーである私的自意識と、公的自意識の平均得点を比較したところ、公的自意識で有意差は認められなかったが、私的自意識では有意差があり、私的自意識の得点の向上が認められた。

次に、夏期キャンプ体験前の「期待度」の高さと体験前の自尊感情および自意識の関係について検討を行ったところ、キャンプに対する期待度の高い者の方が低い者より私的自意識が高いことが示された。そして、キャンプ体験に対する否定的なイメージと私的自意識の低さ、つまり内省面の低さが互に関連し双方向的な関係を形成していることが推測できた。

さらに、期待度と自尊感情および自意識との関係を検討するため、自尊感情、自意識（私的・公的自意識）のそれぞれについて、2（期待度高群・低群）×2（プレ調査・ポスト調査）の分散分析を行った。その結果、夏期キャンプへの期待度が低い者は、自意識とくに私的自意識がキャンプ体験前後で変容する程度が大きいことが示唆された。前述したように期待度の低い者は、キャンプに対する否定的なイメージが強く、その状態で様々なプログラムに参加したと考えられるため、体験中に対人関係面の経験などを積むことによって自分の内面や気分などの自己の側面に注意を向け、自意識、特に私的自意識を変容させたと推測できる。

一方、自尊感情については、全ての分析においてその変容を窺うことはできなかった。自尊感情は、状態によって変化する「状態自尊感情」と比較的安定した「特性自尊感情」の二つに分けて考えることができる。安部・今野（2007）は、「状態自尊感情」を「時間や状況を通した自分に対して感じる全体的な評価であり、日常生活の出来事などに対応して変動するもの」とし、「特性自尊感情」を「時間や状況を通した自分に対して感じる全体的な評価であり、比較的安定しているもの」と定義している。様々な内容のプログラムが展開されるこの無人島でのキャンプ体験も、この両面に影響を与えることにはならなかったと考えられる。今後は、より長期にわたるキャンプ参加者などを対

象とした調査・研究を行っていく必要がある。

以上から、無人島でのキャンプ体験と、自意識、特に私的自意識の関連性が示された。そして、キャンプ体験によって参加者全員の私的自意識の得点が高まるとともに、夏期キャンプ前の期待度が低い者ほど、同キャンプの体験によって、私的自意識の得点が高くなることが示唆された。夏期キャンプに参加するまでのキャンプ体験の影響を受けて形成されている期待度が低い状態は、キャンプ体験に対する否定的なイメージを表していると考えられる。そして、この否定的なイメージがキャンプ体験を通して変容し、内省面の変化、つまり私的自意識の高まりにつながったと考えられる。

Scheier (1980) が、私的自意識が高い者はその時々で自分の意見、態度を自覚しているため、態度と行動との一貫性が高いとしているところから、無人島でのキャンプ体験によって内省面が育成され、行動化への可能性が形成されたと推測できる。

さらに、キャンプ体験の満足度が、キャンプ後の学校生活の諸側面である体験後の学校生活の充実度および、友人関係の深化度に関連していることが示唆された。前述したように同キャンプの趣旨は、キリスト教主義学校としての建学の精神に基づく社会的意義や精神的内容を自然の中での共同生活を通じて理解させることを目的とし、その後の生徒たちの生活姿勢の方向付けを行うために必要な基本的訓練の場を提供することであった。この趣旨は、B 中学校が無人島でのキャンプを実施する教育的意義であると捉えることができる。自分の内面や気分など、他者からは直接知りえることができない自己の側面に注意を向けることである私的自意識の高まり、およびキャンプ体験の満足度がキャンプ体験後の学校生活の充実度および、友人関係の深化度に関連していることは、以上の教育的意義を示していると考えられる。

なお本調査・研究は、無作為割り当てがなされた統制群を設けた計画に基づくものではなく、調査対象が男子学生のみに限られたものであった。また、プレ調査およびポスト調査においても、キャンプ体験以外の要因が影響していること、学校教育の場におけるデータ収集調査であったため、回答者に社会的に



望ましい回答をしようとする一定のバイアスがかかった可能性が考えられ、以上の結果については様々な課題が存在する。

今後は、B 中学校などの調査校と調整を行う中で、統制群を設定するとともに、キャンプ体験以外の要因を排除し、性差（B 中学校における無人島における同夏期キャンプは、次回より男子生徒、女子生徒がともに参加する）や各プログラム内容との関連などについても詳細に分析・考察を進め、キャンプ体験の教育的意義をさらに検討していくことが必要である。

#### 注

- (1) 文部科学省 2012 平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について。
- (2) 文部科学省 2008 中学校学習指導要領。

#### 引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 2007 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16 (1), 36-46.
- 青木康太郎・永吉宏英 2003 長期キャンプ体験における参加者の社会的スキルの変容に関する研究-参加者の特性による変容過程の違いに着目して- 野外教育研究, 6(2), 23-34.
- Fenigstein, A 1979 Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Psychology*, 37, 75-86.
- 藤瀬文子・古川久敬 2005 自尊感情と自己認知との関係性-他者から見られている自己に注目して- 九州大学心理学研究, 6, 189-197.
- 養内 豊 2008 自尊感情, 身体的自己概念の変容に影響する要因-長期キャンプ指導者としての体験から- 北星学園大学文学部北星論集, 45(2), 33-40.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. *Princeton University Press*, pp 17-18.
- 桜井茂男 2000 ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- Scheier, M. F. 1980 Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521.
- 関根章文・飯田 稔 1995 キャンプ経験が一般性自己効力と自己概念に及ぼす影響 日本体育学会大会号, 46, 515.

- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 竹原卓真 2007 SPSS のすすめ 1-2 要因の分散分析をすべてカバー 北大路書房
- 渡辺弥生・伊藤有香・森田美雪 2001 キャンプにおける児童・生徒の達成動機・自尊感情の変化とプログラムの検討, 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 550.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

## 付記

本研究に関わって下さった全ての皆様にお礼申し上げます。中でも、本調査の趣旨をご理解の上ご協力いただきました B 中学校の生徒・教職員の皆様には、深く感謝申し上げます。なお、本論文は関西学院大学大学院文学研究科に瀧 和恵氏が執筆・提出した修士論文を、「人文論究執筆規定」に基づき小谷正登が第一筆者となり加筆・修正したものです。

——小谷正登 学校教育学領域教授——

——瀧 和恵 大学院文学研究科博士課程前期課程——